You, Unlimited

ボランティア・NPO活動センター

RYUKOKU UNIVERSITY

2024年度体験学習プログラム 参加学生レポート集

海外体験学習プログラム
『出会う、知る、気づく　アジア体感スタディツアー』

・インドネシアの教育と環境を実感するスタディツアー
（公益社団法人アジア協会アジア友の会）

・フィリピンスタディツアー
（認定NPO法人アクセス-地球市民と共に歩む会）

事業名	**2024 年度 海外体験体験学習プログラム 『出会う、知る、気づくアジア体感スタディツアー』（インドネシア）**	
プログラム工程	事前学習会：2024 年 12 月 11 日（水） スタディツアー：2025 年 2 月 20 日（木）～2 月 27 日（木）※現地集合・解散 事後学習会：2025 年 3 月 4 日（火） 学内報告会：2025 年 4 月 30 日（水）	
ツアー訪問先	インドネシア共和国（バリ島、ジャワ島）	
企画団体 テーマ（ツアー名）	公益社団法人アジア協会アジア友の会（JAFS） インドネシアの教育と環境を実感するスタディツアー	
本プログラム からの参加学生 （4 名）	矢谷　愛希（法学部法律学科 4 年生）	後藤　彩季（国際学部グローバルスタディーズ学科 3 年生）
	橋本　怜亜（社会学部社会学科 2 年生）	尾関 凌（先端理工学部知能情報メディア学科 2 年生）

ツアー日程	時間	活動内容	場所
2 月 20 日(木)	午後	ジャカルタ・スカルノハッタ国際空港で集合、南タンゲランのひかりスクールへ移動	ジャワ島 南タンゲラン市内
2 月 21 日(金)	午前	ひかりスクールの子供たちとの交流プログラム ・学校周辺のクリーン活動 ・日本文化交流（習字、折り紙、日本語など）	ジャワ島 南タンゲラン市内
	午後	ゴミ山見学 ・現地の方にインタビュー ・インドネシアでの環境教育についてのお話 ポイ捨て禁止の看板づくり	
2 月 22 日(土)	終日	インドネシアの大学生との交流 ・テーマはインドネシアの環境について ・ジャカルタ観光：国立博物館やモナス(独立記念塔) ・明日の料理交流に向けてイオンへ買い出し	ジャワ島 南タンゲラン市内
2 月 23 日(日)	午前～昼	ひかりスクール周辺の村を散策、モスクや生活を見学 インドネシアと日本料理の交流クッキング	ジャワ島 南タンゲラン市内
	午後	バリ島へ移動 デンパサール・ングラ・ライ国際空港へ到着後、宿泊先へ	バリ島
2 月 24 日(月)	終日	・海ガメ保護センター見学 ・サンゴ礁など海洋環境保全について専門家からレクチャー ・ビーチアクティビティ（シュノーケリング）と　ビーチクリーン	バリ島サヌール近郊
2 月 25 日(火)	終日	・マングローブの植林、カヌーに乗ってクリーン活動 ・現地の漁師からのお話 ・現地 NGO のゴミ処理パイロット施設（ごみ銀行など） ・ディアナプラ大学キャンパスで大学生と交流、環境問題についての意見交換	バリ島ベノア湾
2 月 26 日(水)	終日	・観光（タマンアユン寺院、タナロット、ケチャ鑑賞） ・小学生との交流プログラム ・山間農村の学童保育センターを訪問、村のお宅を拝見	バリ島タバナンほか
2 月 27 日(木)	午前	デンパサール国際空港にて解散、帰国の途へ	

矢谷　愛希（法学部法律学科４年生）

私がインドネシアスタディツアーを終えて考えさせられたことは、大きく二つありました。

一つ目は、環境面においてインドネシアは発展途上であり、日本では考えられないような状態が街中や暮らしに見られたことです。私が特に印象に残っているのはゴミ山です。ゴミ山に行くまでの道やゴミを積んだトラックの量、そして捨てられているゴミの数は日本で見られないような光景でした。またそれらのゴミは分別されておらず、ものすごいにおいがしたことを今でも鮮明に覚えています。

ゴミ山を見学し、改めて環境政策や環境教育の大切さを感じました。

大学生との交流や現地の方々の話を聞く中で、日本の環境システムはとても優れているのだと思いました。インドネシアでなぜ日本のような環境システムが進められないかを考えたときに、やはり親世代の教育ができていなかったことが根本的な原因にあると思いました。インドネシアの親世代はポイ捨てをすることに対して、ゴミを拾うことを仕事にしている人へ「自分たちは仕事を与えている」ような感覚を持っているのです。一人一人の環境に対する理解の薄さや危機感のなさが大きな問題としてあり、今インドネシアでは環境への教育に力を入れて取り組んでいることが分かりました。その一つとして富山県と連携し、日本の充実した環境教育を取り入れたフィールドワークが行われているとのことです。

今回現地を訪れて、日本では当たり前だと思っていたことがそうではないと体感することができ、自分たちが恵まれた環境で暮らしていたのだということを改めて感じました。

しかしインドネシアではさらにもう一つ大きな問題として、政府の上層部が富を得るために自分たち中心の政治を行っている現状があります。そのため貧富の格差が拡大したり、環境政策を上手く進められないことが起こっています。このように、環境問題一つをとっても教育や政治など様々な問題が複雑に絡み合っているのだと、現地を訪れて学ぶことができました。

二つ目は、その一方でインドネシアの子どもたちが目をキラキラさせて学校生活を送っていたことです。私は日本の子どもたちと多く関わってきたのですが、日本では勉学に囚われ、出来ないことを恥ずかしいと思う気持ちから、学校という場所がいつしか楽しいものではなくなってしまっていると考えています。

しかしインドネシアの子どもたちは、朝の体操から始まり学校周辺のゴミ拾いなどもみんなで協力して、楽しそうに取り組んでいました。また、日本の文化を体験するときにも自ら進んで取り組もうとする姿勢や、遊んでいる姿がとても印象に残っています。私は来年から教員になる立場として、子どもたちが学校という場所を笑顔で楽しく過ごすためには何が必要なのだろうかと考えるきっかけになりました。

環境は違うけれど、インドネシアの子どもたちの行動や無邪気さは、日本の子どもたちにも同じようにあると思います。私はインドネシアの子どもたちの姿から、「学校」という場所の意味を深く考えてみようと思いました。

このインドネシアスタディツアーで出会えた仲間や交流を行った現地の方々のおかげで、深い学びを得ることができました。インドネシアでの経験を、これから自分自身のキャリアに生かしていきたいと思います。

ひかりスクールで、子どもたちと文化交流しました

後藤　彩季（国際学部グローバルスタディーズ学科３年生）

今回のインドネシアのスタディツアーでは教育と環境を学ぶというテーマのもと、様々な施設を訪れて貴重な経験をすることができた。このツアーを通して私が一番学んだことは、環境教育の重要性と環境問題の現状である。

まずジャワ島では、日本の教育システムを参考に建てられたひかりスクールという小学校に滞在した。ひかりスクールの特徴の一つは、放課後に学童保育が実施されているという点である。私たちはその学童事業を運営している日本人の方のお話を聞いた。その方の話によると、インドネシアでは学校は午前中で終わるため、学力の低さが問題視されている。そこで勉強ができる場を低価格で提供するために、放課後の学校を使って勉強を教えているということだった。また学校の施設だけではなく、学校で働く先生を雇うことで、先生たちの賃金を上げることにも貢献している。

ひかりスクールのもう一つの特徴は、環境教育に力を入れているという点である。日本では幼いころから自然にゴミを分別する習慣がついていたり、ポイ捨てをしないという共通認識があるが、インドネシアでは生ゴミもプラゴミも同じゴミであるため自然に土にかえると考える人も多いそうだ。そのため学校で分別の重要性を教えたり、ポイ捨てがよくないことであると伝えることで、少しずつ現地の人たちの認識を変えていこうする取り組みをしているそうだ。さらにジャワ島では学校だけではなく、ゴミ処理施設を見学した。ゴミ処理場といっても、ただゴミが積まれただけのいわゆる「ゴミ山」である。ゴミ山周辺のにおいはとても強烈で、現地のゴミ処理の問題の深刻さを体感し、環境教育を通してこの現状を変えていく必要性があると感じた。

タンゲランのゴミ山の写真です。お金を稼ぐためにゴミ山に登って作業する人もいました。

ウミガメの保護施設で解説を聞いているときの写真

バリ島では主に海洋に関する環境問題について学んだ。まずはウミガメの保護センターでウミガメが直面している現状を学んだ。ウミガメは環境問題を扱う際によく登場する話題であるが、正直日本にいるときはなぜウミガメが扱われているか知らなかった。しかし、現地のガイドの方のお話から、ウミガメは生まれるときの温度によって性別が変わるため、温度が高すぎるとメスしか生まれなくなってしまい、自然に絶滅してしまう恐れがあるため地球温暖化の影響を直接受けやすいということが分かった。また、海に浮かんでいるプラスチックのゴミは、ウミガメが主食にしているクラゲによく似ており、誤って食べることで病気になったり、死んでしまうこともあるということを知った。海は世界全体でつながっているものであり、もしかすると日本から出たプラゴミによってインドネシアのウミガメに影響を与えているかもしれないと思うと、海洋ゴミの問題は一つの国だけで完結する問題ではなく全世界で考えていかなければいけない問題であると感じた。

今回のツアーを通して環境教育の重要性やごみ問題の現状を知ると同時に、現地の人たちの想いも知ることができた。一人一人は現状を変えたいという気持ちがありながらも、個人の力だけで解決することは難しく、簡単に変わらないことに悩んでいる人が多い印象を受けた。今後は日本人の学生としてインドネシアの現状を変えるためにできることを考えつつ、社会に出てからも今回学んだことを念頭に置きながら、環境問題の解決に少しでも貢献できるような仕事に携わりたいと考えている。

橋本　怜亜（社会学部社会学科２年生）

ツアーに参加した 9 日間は短い時間ではあったがとても濃く、充実した時間を過ごすことができた。ごみ処理施設の見学やマングローブ林での清掃活動、現地大学生との交流など今回のツアーに参加しないと経験できなかったことを経験させていただき、多くを学べた。その中でも特に印象に残っていることが二つある。

一つはジャワ島で見学したごみ山の風景である。今回のツアーに参加するにあたり、事前にインドネシアの現状を調べたのだが、その際、インドネシアのごみ山を映した動画を見つけた。その時は日本では見られない光景に現実離れしたもののように感じていたが、現地で実際に自分の目で見て衝撃を受けた。動画では感じることのできなかったごみの強烈な臭い、山から流れ出た汚水の黒さ、ごみをかき分けるショベルカーが小さく感じるほどのごみ山の大きさは異様な光景だった。ごみ山には毎日トラックいっぱいのごみが大量に運び込まれており、我々が訪れたときもごみをのせたトラックの列ができていた。

ジャワ島のごみ山

もう一つはバリ島でのビーチクリーン活動である。ビーチに落ちているプラスチックごみを拾うという活動だったが、数メートル進むだけでごみ袋がいっぱいになるほどのごみが落ちていた。また、我々がインドネシアを訪れたときは雨季で、比較的暑さが厳しくない気候であったにも関わらず活動中は強い日差しが照り付け、長時間の活動は体力的に厳しいものであった。しかし、ビーチには毎日ごみが漂流しており、毎日暑さに耐えながらごみを拾い続けることは現実的ではない、困難であると感じた。そのため、根本的な「ごみを捨てない」ことが重要であり、そのためにごみに対する適切な考え・意識を広めることが大切であると気づくことができた。

クリーン活動の様子

インドネシアが抱える環境問題の大きな原因の一つに人々のごみに対する意識の低さが挙げられる。日本ではごみの分別やリサイクル、ポイ捨てへの教育が行き届いている。家庭や学校で無意識に学んでいるというのも大きい。一方、インドネシアではごみに対する教育が十分ではない。分別に対する意識が弱く、プラスチック・可燃ごみなどがすべて混ざった状態でごみが回収され、ごみ山に運ばれる。都市部の町中に設置されているごみ箱では分別できる形でごみ箱が設置されているが、回収の段階で一緒にされ、結局分別できていないという場合もあるそうだ。

ごみ問題にはインドネシアだけでなく、世界中で解決に向けて取り組んでいくべきだと感じた。ごみ山に運び込まれるごみは、国内だけでなく他国から輸出されたものも含まれていることがある。近年、アジア各国で廃プラの輸入が規制されており、インドネシアでも規制されているもののゼロではない。日本からも廃プラスチックなどが輸出されていたこともある。今回ツアーに参加するまで、インドネシアのごみ問題は自分とは関係がないことだと感じていたので、驚いたとともに自分事として現状を捉え直さなければならないと考えた。そして、日本、インドネシア以外の国でもごみ問題は発生しており、自国だけの問題ではないと一人ひとりが気付かないといけないと感じた。

今回のツアーを通じて、いかに自分の考えや知識が狭く偏ったものであったかを気づくことができた。また、日本から遠く離れたインドネシアという国の文化や価値観が大きく異なるなかで、共通する部分もあるのだと知ることができ、自分の視野が大きく広がった、そんなツアーになったと感じた。

尾関 凌（先端理工学部知能情報メディア学科２年生）

私は、2 月 20 日～27 日の期間で、アジア協会アジア友の会主催のインドネシアスタディツアーに参加した。普段の旅行とは比べ物にならないほどの充実したスケジュールでジャワ島・バリ島の各地を飛び回り、沢山の景色を見ることができたうえ、協会のご協力がなければ関わることができないような方々からお話を伺うことができたため、とても有意義で学びの多いツアーだったと感じている。個人的に幼いころから興味のあった海洋問題をテーマにこのツアーに臨んだので、海に関連するバリ島での２つの経験をまとめようと思う。

一つ目は、5 日目に Jerman Beach でビーチクリーニングをした時のことである。私は渡航前にある程度下調べをしており、インドネシア海域におけるごみ問題は少し理解した気でいたが、現地に訪れた時には自分の理解が浅かったことを強烈に思い知らされた。ビーチの終端にある大きな像を目印にビーチを往復したのだが、砂浜に散乱したごみの種類はペットボトルやお菓子の袋、ズボンなど非常に多岐にわたり、これが拾っても拾っても減る気がしないのである。特に、折り返し地点の像があるテトラポッドの隙間には、おびただしい量のプラスチックごみが堆積しており、もはやすべてを拾いきるのは諦めるほどであった。

私がこの惨状を目の当たりにして辛いほど感じたのは何を隠そう「無力感」である。たかだか数人が数時間炎天下の中ゴミを拾ったところでビーチの状況がほとんど改善しないことを悟った時、一人の人間とはなんて無力な存在なのだろうと思ってしまった。それと同時に、そもそもここに流れ着くごみを減らすために適切な分別を行ったり、処理場の数を増やしたりと、より根本からごみ問題にてこを入れることの重要性を、身をもって思い知った。

ビーチを歩きながらゴミ拾いをしている様子

二つ目は、6 日目に Pedungan のマングローブエリアで、ゴミ拾いをしたり、漁師の方にお話を伺ったりした時のことである。まずマングローブ林でのごみ拾いだが、ここでは二人一組でカヌーに乗ってゴミが浮いている場所まで移動して回収するという方式であり、いざ拾おうとするとプラスチックごみがマングローブの根っこにきつく絡まっており全く拾えなかったのが印象的だった。これだけひどく絡まっていればマングローブ林にゴミが集まってしまうのも無理はないと感じた。

マングローブ林にてカヌーに乗っている様子

カヌーを降りると現地の漁師の方からマングローブの性質や歴史などについてお話を伺うことができた。私は沖縄によく訪れるためマングローブについてはなんとなく知っているつもりだったが、お話によるとインドネシアのマングローブは日本と比べて種類が豊富で、周りにある生態系も全く異なるものであるらしく、一口にマングローブといっても色々な姿があることを知った。そもそもインドネシア海域に流れ着くごみは自国のものだけでなく、アジア近辺から漂流してきたものも含まれているそうで、ゴミ問題は国単体ではなく周りの国とも協力して解決する問題なのだと思った。またマングローブの根っこは小さい魚を捕食者から守る役割も担っているそうで、生態系の維持に欠かせない存在であることも学んだ。

今回のツアーを通して、以前まで抱いていた海へのイメージとは異なった現状を叩きつけられたことに衝撃を受けたとともに、これを肌で感じた人にしか分からない危機感というものが確実にあると感じた。帰国が終わりではなく、今回学んだことをきっかけに、問題が起こっている場所に実際に訪れて現状を肌で感じることの大切さを伝えられるようになりたいと感じた。これからも世界で起こっている諸問題を他人事と思わず、現地の人の立場に立って考えられるような人間に成長していきたい。

事業名	**2024 年度 海外体験体験学習プログラム 『出会う、知る、気づくアジア体感スタディツアー』（フィリピン）**	
プログラム工程	事前学習会：2024 年 12 月 11 日（水） スタディツアー：2025 年 3 月 5 日（水）～3 月 12 日（水）※現地集合・解散 事後学習会：2025 年 3 月 25 日（火） 学内報告会：2025 年 4 月 30 日（水）	
ツアー訪問先	フィリピン共和国（マニラ首都圏、農漁村ペレーズ）	
企画団体 テーマ（ツアー名）	認定 NPO 法人アクセスー共生社会をめざす地球市民の会 フィリピン・スタディツアー	
本プログラム からの参加学生 （5 名）	松浪　愛音（国際学部　国際文化学科 3 年生）	村松　晃太朗（国際学部　国際文化学科 3 年生）
	西桶　虎太郎（社会学部　現代福祉学科 2 年生）	安岡　七海（国際学部　国際文化学科 1 年生）
	吉永　彩乃（経済学部 1 年生）	

ツアー日程	時間	活動内容	場所
3 月 5 日(水)	午後	マニラ国際空港で集合、宿泊ホテルへ移動 オリエンテーション（自己紹介、ツアー中の注意事項、フィリピン概要・文化など）	マニラ市内
3 月 6 日(木)	終日	都市スラムトンド地区に関する活動 オリエンテーション、アクセスのヘルピング地域にて家庭訪問、住民の子どもたちとの遊びなど 宿泊先に戻って感想シェア	マニラ市北西部のスラム･トンド地区
3 月 7 日(金)	午前	ペレーズへ移動。到着後、宿舎へ。	農漁村ペレーズ
	午後	ペレーズに関するオリエンテーション（地史、漁業・農業）、感想シェアなど	
3 月 8 日(土)	午前	ペレーズの中心部にてコミュニティツアー	ペレーズ
	午後	ホームステイ先のビリヤマンサノスール村へ移動 到着後、家庭訪問や村の子どもたちと交流 各ホームステイ先へ移動	ビリヤマンサノスール村
3 月 9 日(日)	終日	フェアトレード関連の活動 ・オリエンテーション、商品の生産体験 ・グループに分かれ生産者のライフストーリーを聴く、 ・商品のバザー ・ペレーズ地区のアクセススタッフからのお話 ・ディスカッション、翌日のオリエンテーション	ペレーズ
3 月 10 日(月)	午前	マニラへ移動。到着後、宿舎へ。	マニラ市内
	午後	戦争に関するオリエンテーション、感想シェアなど	
3 月 11 日(火)	終日	サンチャゴ要塞訪問、語り部解説による見学ツアー 感想シェア、翌日のオリエンテーションなど	マニラ市内
3 月 12 日(水)	午前	マニラ空港にて解散	

松浪　愛音（国際学部国際文化学科３年生）

「考えることをやめないでほしい」
今回のツアーの呼びかけ団体である認定 NPO 法人アクセス理事長・事務局長 野田沙良さんの言葉が心に残っている。私にとってこのスタディツアーは、これまで興味があったけれども調べずに置いてきた分野たち―国際協力、NPO、貧困、スラム街 等― の詰め合わせツアーであった。私はこのツアーに参加して、たくさんのことを考え始める良いきっかけとなったと考えている。

マニラ市北西部のトンド地区と農漁村ペレーズに訪問したとき、私は正直その環境にそれほど圧倒されず、不思議なほどに目の前の光景を受け入れられてしまった。私が日本で暮らしているのと同様に、そこには人々の日常があり、生活が営まれていた。

トンド地区の子どもたちと手遊びを通じて交流している様子

しかし日本に帰国した後、逆カルチャーショックを受けた。発達しすぎた駅構内、家路のコンビニでふらっと買い物をする人々、家にある明日とそれ以降分の家族~~分~~の食事、勉強道具や趣味のもの。「私は恵まれている」と感じ、帰国して初めて現地での彼らの生活「その日暮らし」の意味を自分なりに理解した。次の日起きて思い出すのは、あのトンドやペレーズの暮らしで、それらの場所は貧困状況にあると私は考えた。

このツアー参加での大きな学びは、これまであまり分かっていなかった NPO のしくみや役割を理解し、支援のゴールをこの目で見ることができたことである。アクセスは私たちが今回訪問したトンドやペレーズの子どもたちの教育支援を行っている団体である。誰もが一度に短期間で世界の課題を解決することはできないけれど、この大きすぎる世界のほんの小さな場所や人々・問題などを解決したり救ったりすることによって、その周りから世界を変える希望になるかもしれないと考えた。現場を見たことで「子どもに教育を」と謳われるのにはとても大きな意味があると実感できた。

サンチャゴ要塞訪問・歴史学習では、戦争の歴史だけでなく、現在にも続く国同士の力関係や経済状況を学ぶことが出来た。今後はニュースやさまざまな学びの内容に対し、聞いたふりをせずに向き合って調べ、自分事として捉えていくことができるだろう。

今回訪問した場所やフィリピンだけでなく、日本も日本なりの問題を抱えている。どの国もどの人も問題は抱えていて、そのすべてを一度に解決することは不可能である。私は幸いにも教育制度が整っている国に生まれ、問題や辛さを感じることなく大学に通うことができ、教育を受けている。考える機会もあり、自分で学ぼうとすればできる環境下にいる。

教育を受けている私が考えられること・学べること・できることは何か。今すぐに何かができなくても、フィリピンで見た光景や、参加者たちと夜遅くまで共有し合った考えを思い出し、考え疑問を持ち続けることはできる。

私は 2025 年度後期から交換留学に行くが、留学前だからそこのツアーに参加して本当に良かったと感じている。これから留学先での履修登録が始まるが、今回のツアーのテーマに直接関わること、そうでないことについても世界中からの学生と意見交換をして、多様な背景を持つ人それぞれの視点や新たな問題を知り、疑問を持って「考えることをやめない」でいきたい。

農漁村ペレーズへ向かう船内

村松　晃太朗（国際学部　国際文化学科 3 年生）

今回、初めてフィリピンへ渡航しました。このスタディツアーを通して、都市スラムへの訪問や農村地区でのホームステイ、フィリピンの戦争について学ぶなど、普通の旅行や留学では決して得ることのできない経験ができ、非常に嬉しく思います。その中でも、私にとって特に印象に残っているエピソードを 2 つお伝えしたいと思います。

それはマニラ北西部に位置するトンド地区での家庭訪問と、農漁村ペレーズでのホームステイです。まずトンド地区では、我々の普段の生活では考えられないような生活の状況が町一帯に広がっていました。非常に簡易的で今にも崩れそうな家が軒を連ね、日用品や食料の廃材が山積した場所で多くの子供が遊んでいたり、人が生活したりしている光景を目の当たりにした私は衝撃を受け、言葉を失いました。実際に私が訪問した家の造りにおいても、木やコンクリートが剥き出しで簡易的なものでした。

しかしながら、その家庭では我々の普段の生活と同じように、炊事や洗濯といった基本的な生活を行うための日用品などが置かれており、我々の生活とそれほど大差が無いと個人的に感じました。さらに、携帯電話やテレビなどの電子機器が使用されていたことに関しても非常に驚かされ、貧困という最低限度以下の生活を強いられている人々においても、我々と同じようなモノが使われていたことに驚きました。しかし経済的な面では、収入がフィリピン平均の半分で日頃から困窮を極め、特にアクセスが取り組んでいるような子供たちへの教育支援が欠かせない状況にあります。このことから、貧困と教育格差は、切っても切り離せない関係なのだと知りました。

トンド地区の様子

ペレーズでのホストファミリー

続いて、アラバット島ペレーズにてホームステイをした時のエピソードです。私を受け入れてくれたホストファミリーは６人家族で、非常に強固な兄弟愛と家族愛が溢れる、幸せに満ちたご家庭でした。また、私のことを家族全員が笑顔で迎え入れてくれ、非常に美味しい料理をふるまってくれるなど、非常に幸せな一晩を過ごしました。しかし、この家族を含めたペレーズ地区に住む人々の生活は、様々な場面において困窮状況にあると思うと、非常に胸が痛みました。また、この家族のお父さんも、貧困層が就く職業の一つで時には危険が伴う漁師をしていますが、乱獲などで年々漁獲量が減って生活が苦しいことを知りました。そんな中で、見ず知らずの日本の若者である私に多くの料理をふるまい、歓迎してくれたことに非常に感謝しています。

以上のような経験を通して私が得たものは「勇気」です。トンド地区やペレーズで出会った子供たちは非常に大きな夢や目標を持ち、日々前向きに生活を送る姿や学校での勉強や仕事に奮闘する姿を見たときに、少しのことでマイナスな言葉を吐いたりする自分が非常に情けなく感じました。そこで私は現地の方から受けた「勇気」を今後の自分の成長の糧にしていきたいと思います。

また、「貧困」というのは人間に課された永遠の課題だと私は思います。そのため、今回のスタディツアーで学び得たものを駆使し、私なりにフィリピンの貧困について考え続けていきたいと思います。

西桶　虎太郎（社会学部現代福祉学科２年生）

今回のツアーは現地集合・現地解散であったため、参加前に約１ヶ月フィリピンの他に６カ国、東南アジアの国々を１人でまわり、実際に他の国を訪れて他の国と比較するという、私にしかできない、ツアーでの学びにもつながる良い勉強ができました。しかしながら、私はツアー前日にフィリピンに入国し、勉強不足だったため、推奨されてない真夜中のマニラの散策をしてしまい、現地の方の活力に圧倒されました。ツアーの日程には都市スラムへの訪問、ホームステイなどが予定されていため、ツアー前日の経験から現地の方との交流、さらにはツアーに対しても不安を持った状態で参加しました。しかし、８日間の行程を終えて振り返ってみると、その不安は単なる杞憂であったと感じることが出来るほど、ツアーは楽しかった、良い経験ができたと思えるものでした。

中でも、良い経験ができたと印象に残ったことは、同じツアー参加者同士での会話の時間です。今回のツアーでは移動時間や宿泊施設での自由時間、そしてペレーズで過ごした３日間など、話し尽くせるほどの時間がありました。特にペレーズでの３日間は、通信環境が不安定であったため、暇さえあればスマートフォンと向き合ってしまう私にとっては新鮮で貴重な時間でした。他の参加者も同じ意見を持っている人が多く、今回のツアーに参加するにあたり、それぞれの目的や夢について語り合うことで、より一層仲を深めることができたと感じています。また、一人旅をしていた時は、自分で振り返る時間は多くありましたが、どうしても私の意見だけでは納得のいかない出来事も多くありました。

しかし今回のツアーでは、疑問に思ったことはすぐに投げかけ、相手の意見を取り入れることで、新たな学びにしようとする参加者が多かったため、私自身も発言がしやすく、他の意見を聞くたびに考えさせられることがありました。

ツアー参加者同士で会話をしている場面

次に印象に残ったことは、現地の人との交流です。フィリピンでの最初の出来事は圧倒されるものだったため、フィリピン人はこういう人ばかりだと固定観念を持ってしまっていました。しかし、ツアーが始まってみると、都市スラムでは陽気な人が多く、子どもたちからもバスケットボールに誘われたり、英語が得意ではない私にも分かるように、簡単な言葉で話しかけてくれるなど快く受け入れてもらい、印象が 180 度変わりました。

このことから、もともと抱いていた印象などは、深く交流することで変わることがあるので、壁を作らずに一歩踏み出してみることが大切だと学びました。また、深く知っていくことで、快く受け入れてくれる裏側では、自身の生活が苦しくなっても相手をもてなすという文化があることや、相手に苦しい姿は見せずに気丈に振る舞うことがあると知りました。それは、深く交流したつもりであっても気づくことが出来なかったことであり、理解しようとしても理解しきれないものでもあります。

都市スラムの子供たちと交流する場面

このように今回のツアーに参加し、現地の方々と交流する機会を得たことで、普段は気づきにくい問題を認識できました。そして小さな疑問であったとしても、他の人と共有してみることで、大きな発見につながることもあると今回のツアーで学びました。

安岡 七海（国際学部国際文化学科１年生）

フィリピンに入国してすぐ、文化や考え方の違いに圧倒されてしまうのではないかと思っていたが、実際は共通点も多く発見できた。日本で過ごしていると海外との違いばかり気になっていたのだと実感するほど、フィリピンに入国しマニラの街や人を観察していると目に入ってくる情報は、想像していた以上に身近なものが多かった。だが、それは一部の地域の話であると８日間を通して気付いた。

振り返ってみると、日本では決して見ることのない光景が多くあった。印象的だったのは、バスで移動している時、窓から見えた街の景色である。道路の奥には高層マンションが立ち並んでいる一方、手前には継ぎ接ぎの施されているボロボロの家が密集している都市スラムがある。この対照的な建物の様子を見て第一に「なぜこの状況が許されているのか、なぜ市民も声を挙げないのか」と違和感を覚えた。それから訪れた都市スラムのトンド地区や農漁村ペレーズで出会った人々もこの状況を受け入れざるを得ない様子だった。

この違和感の正体を明かすことができたのは、７日目にサンチャゴ要塞に訪問し戦争やフィリピンの社会構造について学ぶことができたからだ。これまで世界史の授業で学んだ戦争は日本からの視点でしか書かれておらず、戦時中日本に統治されていた国の当時やその後のことについて全く無知であった。だからこそ、マニラで快適に過ごし、スラムでの家庭訪問やペレーズでのホームステイなどで貧しい生活を目の当たりにした後に、実は日本がこの経済格差の元凶に加担しているという事実を受け入れるのに時間を要した。このツアーに参加していなければ、フェアトレードに関心がある身にも拘らずこの事実を知ることのないまま学生生活を終えるところであったと危機感を持ったからだ。

サンチャゴ要塞にて戦時中他国から支配を受けていたフィリピンを象徴する門を通って行く様子

以前から日本で「フェアトレード」というとガーナのカカオやエチオピアのコーヒーが注目されている一方、フィリピンのココナッツ雑貨のような東南アジアにおいて生産されている商品は疎かにされている。「自国の歴史的事実により貧困が招かれている国のフェアトレードに関心を持たずしてどうする」とこれから学んでいきたいことを確認することができた。

また、正当な給料を貰えずに困窮する人々の話は公平な取引の重要性を改めて教えてくれると同時に、消費活動を『投票』だと捉えると、我々のような世界中の消費者はその一票でこれからの世の中を変えていける『有権者』と考えることができる。そのことを忘れずに今後生活したい。

ココナッツの殻を使用したフェアトレード製品づくりを体験している様子

ツアー中には様々な人に出会ったが、特に印象深かった人物はホームマザーである。初めての海外かつ他人の家に泊まった経験もない人間がホームステイをするということで大きな不安があった。しかし、すぐにそれが杞憂であったと分かった。ホームマザーに英語で話しても少ししか伝わらなかったが、彼女の表情や行動が我々を歓迎してくれていると感じ安心して過ごすことができた。言葉を介することはなくともお互いの気持ちを理解しあう力が表情や行動にはある。

日本では経験しないであろうことが当たり前に起こり、新たな発見が多くある８日間だった。その時間を共に共有する仲間との出会いもこのツアーの醍醐味の一つであろう。これからは、フィリピンを含め他国との関わり方について考え続けること、そしてそれを仲間以外の人々にも共有する時間を設けることを今まで以上に大切にしていきたいと思う。

吉永　彩乃（経済学部１年生）

今回のスタディツアーを通して、現地の生活を経験し、自身の目で見て、自身の心で感じることが非常に大切であると感じた。実際に現地に行ったことで、ニュースや教科書では分からない現地の姿を知ることができた。また、貧困や生活環境の違いを肌で感じることで、自分の視野が広がったと実感している。

特に印象的であった１つ目として、フィリピン人のおもてなし精神をあげる。

農漁村ペレーズを訪問した際、現地の人々の温かさや笑顔に触れ、「貧しくても心は豊かであり、今の生活に満足しているのだな」と強く感じた。経済的な面では貧困であるが、精神的な面からみると、日本人より心は豊かであるように見えたからだ。しかし、それはおもてなし精神が関係しており、「客が来たら幸せな部分だけを提供している」「チャンスや選択肢がないから現状に満足するしかないのだ」という現地のスタッフの声を聞いたとき、非常に衝撃を受けた。この現地の声を聞いたことで、ペレーズの人々の幸せそうな表情の裏には、厳しく辛い貧困の現実が隠されていると気づかされた。実際にホームステイ先の食卓で、私たちは多くの料理を食べさせてもらったが、わずかな量しか食べていなかったホストファミリーたち。私たちのとなりで一生懸命にご飯を頬張る子供の姿を思い出すと、彼らの日常は決して余裕のあるものではないとリアルで伝わったきた。しかし、日常生活を送ることが精一杯な現状であっても、辛い部分は見せずに、第一に他人のことを考えるフィリピン人のおもてなし精神にとても感動した。そして日本がどれほど恵まれた環境であるのか、ペレーズ訪問を通して考えることもできた。

農漁村ペレーズを訪問した際の交流会の様子。集まってくれた村の子供たちに食べ物を手渡している。

２つ目に、サンチャゴ要塞訪問についてあげる。

サンチャゴ要塞は、スペイン統治時代につくられた軍の拠点であり、日本軍によってフィリピン人大量虐殺が起きた場所である。私は説明を受ける前、サンチャゴ要塞について何も知らず、日本とフィリピンの歴史について聞いたこともなかった。日本の学校では教えられていなかった日本軍の行為を初めて知り、自ら学び、考えなければいけないと強く思った。また「日本人の真面目さと効率性が裏目に出た」という話を聞いた時、日本では良い性格として解釈される「真面目さ」が、別の人にとっては「冷酷さ」にもなりうるのだと感じた。そして、自分がこれまで認識している価値観も、状況によっては異なる視点で考えられ、全く違う意味を持つことに気づくことができた。

サンチャゴ要塞を訪れたときの様子。現地の方であるティトさんが説明をしてくれている。

フィリピンでのスタディツアーを通して、より広い視野を持つことができたと感じる。そして、現地の人たちと交流したことによって私は、「寄付」は募金をする、物を送るだけではなく、伝えることも支援の１つだと感じた。貧困の現状や支援の必要性を知ってもらうことは、誰かの意識を変えるきっかけになるため、支援につながると考えたからだ。だからこそ、自分自身が現地で経験した生活や文化、歴史などをこれから多くの人に伝えていきたいと思う。そして、今回の経験を大学生活での学びにつなげていきたい。

龍谷大学ボランティア・NPO活動センター

ホームページ：https://www.ryukoku.ac.jp/npo/
E-mail :ryuvnc@ad.ryukoku.ac.jp

深草：〒612-8577　京都市伏見区深草塚本町67
TEL：075-645-2047　Fax:075-645-2064

瀬田：〒520-2194　大津市瀬田大江町横谷1-5
TEL：077-544-7252　Fax:077-544-7261

RYUKOKU UNIVERSITY